

論文の内容の要旨

論文題目 植民地都市台北における日本人の生活文化——「空間」と「時間」
における移植、変容——

Life and Culture of the Japanese in Colonial Taipei :
Transplantation and Transformation in Space and Time

氏名 顔杏如

本論文は日本人の居住の割合が最も高い台北を対象として、いままで「抑圧—抵抗」、
「支配—被支配」という単純な二項対立的構図の下で「植民者」として簡約化された在台
日本人の様相を再検証し、また、体験された「時間」と「空間」の視角から、彼らの「外
地」台湾での生活文化の様態を考察した。

第一部「人——帝国の空間から見た在台日本人」は、在台日本人がどのような人々／集
団なのか、どのようなコンテキストで如何なる時代意識を持っていたのかという問いに答
えることを試みた。第一章「在台日本人のプロファイル」では、台湾領有時点に立ち戻り、
日本人の台湾認識、日本本土の社会環境、植民地政府が日本人に求める使命を検証し、在
台日本人の台湾渡航のプッシュとプルの要因を考察した。また、統計書などを利用して在
台日本人の職業、本籍、居住地など、いくつかの特色を抽出し、彼らのアウトラインをつか
んだ。第二章「流転の故郷の影」では、帝国の拡張と共に外へ移動していった在台日本人
のアイデンティティと深く関わる故郷意識が、時間と世代の差異によってどのように変化
し、どのような故郷の空間が如何なるコンテキストのなかで構築されてきたのかを考察し
た。

明治維新以後大きな社会変動に置かれながら、危険を顧みずに、自分の運命を拓く可能
性のある新付の地・台湾へ赴くことを選んだのは、日本内地で生活に行き詰まったり、一
攫千金を夢見たりする社会周縁の人々であった。公務業に携わった人々も、その大半は嘱
託雇員以下の下級職員であり、直接には統治の掌に当たらない人々が多く存在していた。

在台日本人は異郷の台湾において他者と対面して、外的な体裁においても、精神的な面においても「母国人らしさ」を求められたり、在台日本人の間での連帯感と「内地人」としてのアイデンティティが形成されたりした一方、母国から離れていき、「土着化」、「台湾化」する傾向も免れなかった。

第一部は、いままで統治者、植民者と目されてきた在台日本人を「日本内地から外へ移動した」という「移動者」の視点で捉え、彼らの帝国の空間における「外在的」、「内在的」相貌を再検証した。その結果、在台日本人は「日本社会での周縁」と「帝国の空間での辺境」という二重の周縁性と、「母国日本」と「現地台湾」の間を揺れ動く故郷意識に潜むアイデンティティの変動的で複雑な様相を見出すことができた。

第二部「空間」は、在台日本人と植民地都市台北とのインターアクションに光を当てた。風景が作り出される過程で、風景／空間に対する感受性と解釈がどのように風景／空間の創出に働いたのかに着目し、在台日本人が風景へ投じたまなざし、語りに現れた集団化した表現、都市での足跡、営為などを含む都市空間との相互関係を考察した。

第三章「語られた台北」は、在台日本人の都市空間に関する叙述から植民地都市台北における彼らの体験や、彼らの視線に潜んでいる意味合いと実際の生活の軌跡を明らかにした。第四章「南国風景の創造」は、在台日本人によく描写される都市風景の一つである並木に焦点をあて、風景が作られた過程とその過程に社会的、文化的見方とまなざしがどのように風景の創出に働きかけたのかを考察した。さらに、配置された風景が生活風景としてどのように人々に描写されたのかを検討した。第五章『「内地風景」の移植』は、南国を象徴する並木と対比的な存在である桜の植栽、移植の動機と意味合いの変遷を考察した。

在台日本人と都市空間とのインターアクションを考察した結果、作り出された都市景観は、植民政府権力の誇示を伴いつつ、在台日本人の母国へのノスタルジア、台湾社会に同化される危機感、行楽の欲望と南国に対する認識・想像など、様々な心情や考えと深く結び付いていたことが浮き彫りにされた。「植民者」、「母国人」、「離郷者」など、在台日本人の多重な性格によって規定されたまなざしと風景への感受性は、都市空間を変容させた。さらに、そのような視線、心情に基づいて作り出した空間は再び彼らの生活空間となって、彼らの視線を引き寄せ、彼らの文化的、社会的な表現となった。このように、植民地都市台北の空間は在台日本人の社会的文化的な見方と風景との絶え間ない対話であり、彼等の性格、見方と台湾の風景が絶えずに連動して創り上げた空間といえる。

最後の第三部「時間」では、生活と文化の中身の一部を構成した祝日がどのように植民地台湾で過ごされパフォーマンスされたのかを検討した。さらに、それらの祝日が植民地統治と、在台日本人自分自身に対してどのような意味合いをもっていたのか考察した。

第六章「国家の祝日」は、もともと民衆の生活と無縁であった紀元節と天長節を取り上

げ、新しい「帝国の時間」がどのように新付の地に伝えられていったのかを検討し、人々の意識、祝日の模様とその変化を明らかにした。第七章「伝統的な祝日と行事」では、日本本土で抑圧されながらも実生活に息づいていた伝統的な節句が、日本人の植民地への海を越えた移動により、どのように移植され存続し続けたのか、あるいは変容したり衰微したりしたのかを考察した。第八章「二つの正月」は、正月を例として、同じ植民地空間におかれる日本人と台湾人の生活リズム、異なる生活リズムが織り成した植民地の風景、そこで生まれた文化の変容を探究した。

生活文化を搭載する時間＝祝日の考察を通して、都市での祝祭空間、生活リズムに潜む国家的な時間の展示、そして、植民地というコンテクストで祝日に付与された意味合いが明らかになった。すなわち、国家的な祝日は、新しい統治者としての威信の確立、新付の民に対する忠君愛国の精神の涵養、建国精神の注入を狙うものであった。一方、伝統的な祝日は、外地での生活に趣を与え、日本人に新領地に永住させ、「母国古来の良風美俗」の植民地への移植を介して「精神の内地化」をも期待するものであった。ただし、これらの祝日の展開は日本の「伝統」や「新しい伝統」の移植である一方、台湾の気候と地理環境、さらに台湾人社会の生活リズムと妥協せざるを得ず、新しい時間感覚を形成し、生活を秩序づけていたのであった。さらに、時節柄の行事、活動内容にふさわしい場所を見つけるため、多くの場所は内地の名所として投影され「固定化」され、在台日本人の行楽空間として形成されていった。

一方、新しい時間の推進過程において、在台日本人が「母国人」としての使命感により自ら進んで模範となろうとする姿勢が看取されると同時に、彼ら自身も教化される対象であったことも見逃せない。国家の時間の移植は、初期の頃から、植民地政府からの規制、働きかけが大きな影響力を持っていた。戦争期に入ってから、国家的な時間から伝統的な時間まで、国家の力の介入によって大きく変えられ、国民精神の鼓舞、培養の時間へと変質させられ、時間の内実は均質化されていくようになったのであった。

本論文は台北の在台日本人を考察の対象の中心に据え、人、時間、空間の三つの視角を反映した三部構成となっている。だが、この三者は独立しているのではなく、在台日本人の性格と、時間と空間で検証されたところの生活文化はお互いに関連していた。また、彼らと新領土台湾との関係、母国日本との関係はまた作用力として在台日本人の性格と生活文化に影響を与えていたのである。在台日本人の性格は、帝国／母国日本と植民地／現地台湾という二つの軸の闘ぎあいにより規定されていた。帝国の空間はその周縁的な位置を決定し、植民地の空間は母国人としての模範を求めている。彼らのこのような相貌は、彼らの台湾での営為、形成した生活文化、新領土への態度、そして台湾という土地とのインターアクションを規定した。そして、そのような台湾での営為と彼らが形成した生活文化

はまた再び在台日本人の相貌、時代心理とアイデンティティを改変したのであった。

時間と空間に見た生活文化の形成のプロセスにも、母国日本と現地台湾という二つの軸の相互作用が表れている。「母国日本」という軸には、伝統の生活様式の移植、政府の強制力による作られた伝統と文明の移植、及び、他者と対面して引き起こした内部自身の求心力と文化の融合が含まれる。一方、「現地台湾」という軸には、植民地台湾に規制されるコンテキスト、気候、地理などの客観環境のほか、台湾人社会の影響、南国への憧憬、認識などの異文化体験で生まれてきた変容の力も含まれる。在台日本人と彼らが形成した生活文化はこのように、母国日本と現地台湾という二つの軸に縫いながら、その間で揺れられ、馴れ合い、擦れ合っていた。

移動と、移動に伴う異文化の体験は、植民地社会に多様なエネルギーとダイナミックスをもたらした。相互作用するダイナミックスは複雑な時空の様相を織り成して植民地で上演され、展開された。植民者自身にも、被植民者にも、文化の融合と変容を迫り、元来の生活文化を変容させ、考え方や価値観に変化を起こさせたのであった。この複雑な、多様な作用力が構成した生活相貌と時代心理を理解することによって、植民地社会の人々の感知、経験と生活の様態に一層接近し、今日の台湾を構成した要素をより深く理解することができよう。戦前、在台日本人が作り出した都市景観、形成した生活文化、及び、戦後の台湾社会に息づいている日本時代の名残は、単に在台日本人による単一な方向の「移入」によって創出されたのではない。むしろそれらは、在台日本人と植民地台湾との、双方向的な対話とインターアクションの結果として考えられるのである。